

空

弓月キリ  
月夜のよろず屋

## 目次

空 青空	6
空 曇り空	8
空 夕暮れ空	13
空 夜空	15
空アフター 夏空	27
空アフター 夕焼け空	34
空アフター 星空	37
空アフター 夜空	41
空おまけ 140字小説まとめ	46
空書き下ろし 青空の下で	48

あとがき

この本は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になる環境により、表示の差が認められることがあります。

本書に登場する人物名・団体名・描かれている内容は架空のもので、作中において現代では若干耳慣れない言葉・表記・表現が登場しますが、これらは差別・侮蔑を意図する考えに基づくものではありません。

なお、発行している小説本やグッズは、すべて自分で製本・制作しています。（全てコンビニプリントやセルフプリントで印刷し、自分で平綴じ製本またはフリーソフト等を使って電子書籍データへの変換をしております）

そのため、乱丁・落丁・あまりにもひどい汚れ等がありましたら、お取替えさせていただきますので、弓月キリまでメールかSNSのDM等にてお知らせください。

読んでいて気になりそうな汚れや不揃いの部分、ズレなどではできるだけように配慮して印刷・製本・制作をしておりますが、本文に影響のない軽微な汚れやズレなどは何卒ご容赦いただけますと幸いです。

## 空 青空

幼なじみが信号待ちの間、自転車を停めて天色の空を見上げている。何か見えたのかと聞いてみることにした。

「何、見上げているんだ？」

「いや、腹が立つくらい良い天気だなんて」

「天気がいいなら、良いことだら」

少しだけ間があって。

「だな」

という答えが帰ってきた。

「信号が変わったな。行こう」

「おー」

天色の空、飛行機雲。

ただでさえ暑いのに、アスファルトの照り返しで溶けるかと思うくらいに暑い。いい天気なのは悪いことじゃないけど、幼なじみが思わず悪態をついてしまうのもわかる気がしたので、彼にとっては魅力的な提案をすることに。

「これだけ暑いとさ、晩ご飯ついでにファミレスに寄ってから帰るのもアリだよな」

「賛成」

案の定、迷うことがないくらいすぐに肯定の返事が。嫌だと言われないことをわかっていて言っているんだから、これは提案じゃなくて確定事項だと言っても過言ではないだろう。

社会人になった俺たちが、お盆休みの炎天下、それも昼間に自転車で行こうとしているのかは、また後で。

## 空 曇り空

「さっきは『腹が立つくらい良い天気だ』って言ったけどさ」  
「うん」

「今は涼しくなるどころか、湿度が上がって更に不快になった……」

「確かに……」

俺たちは目的地である寺院墓地に着いたのに自転車から動けないでいる。さっきまでの良い天気はいつの間にか曇り天になってしまっていて、良い天気の影響はどこにも見当たらなかった。心なしか自転車のかごにある生花も元気がなさそうに見えた。

「雨の確率は低いって、今朝のラジオの天気予報で言ってたんだけどなあ」

「最近、短時間の大雨が降るってニュースでやっていたし、確率が低くても降るかもしれない」

「お前、ニュースを見ているのか？」

「帰ってきたら、ニュースしかやっていないからな」

帰宅後はニュースを見ながら飼い猫である『同居人』に今日の報告をしつつ、ご飯を食べるのが俺の日課となっている。ご飯を食べ終わったら「もういいのか？ じゃあ遊べ」と黒い尻尾で俺の足を叩いてくるのが憎らしくもあり可愛らしくもある。帰ったら、ご飯をやらないと。

「そうか。何にしても、雨が降るかもしれないのなら、早いうちに用事を済ませよう。俺たちが暑さで溶ける前に」

「異議なし」

自転車から降りて、本堂へと向かう。

住職に挨拶を済ませ、借りた手桶とバケツに水を入れて戻ってくる幼なじみを同じく借りたひしゃくと雑巾を持って待っていると住職に話しかけられた。

「今日は暑いですね」

「本当ですね」

「今年で四年になりますか」

「はい」

他愛のない話をしながら待っていると幼なじみが戻ってきた。

「お待たせ。じゃあ、行こうか。住職さん、また後で」

「はい」

住職と別れて必要なものを両手で全部持って歩く幼なじみの後ろをついて行く。「俺も持つ」  
って毎回言っても毎回「嫌だ」と断られるので、俺は手ぶらだ。

寺院墓地の隅の方に俺たちの目的の墓があった。冗談交じりではあったけど墓の希望につい

て話していた通り、両親とは別の、彼女だけが入っている墓の前で。

「姉貴」

ぼそっと小さな声で、幼なじみが声をかけた。俺も同じくらい小さな声で声をかけることにする。

「久しぶり」

合掌してから二人で掃除をして、ひしゃくで墓石に打ち水をする。花立水鉢に水を入れて生花をさしたら、お供え物を置く。

毎年、二人でやっているお決まりの流れ。

「なあ、ライター、持ってないか？」

「悪いが、持ってない。十か月前に猫を飼い始めた時にタバコはやめたんだよ」

「奇遇だな。俺もタバコをやめたんだ」

「へえ。どんな心境の変化があったんだ？」

「半年前に夢で姉貴に吸い過ぎだって。それに、お前の家に行くなら吸うなって怒られた」  
「なるほど。確かに俺でも心配にもなる量を会う度に吸っていたっけなあ」

——でも、俺の家に行くなら吸うなって？

どういう意味だろう。あの人は、どこかで俺たちを見守っているのだろうか？

——確証がない。黙っていることにしよう。

憶測を言っても変なオカルトみたいな話になりそうだから。不思議と怖さは感じないけど。

「二人してライターを持ってないなら、住職さんから念のために借りたマッチを使うか」

幼なじみがマッチに火をつけてみると火はついたので、問題なく線香をあげることはできそうだ。幼なじみはそれなりに話すことがあったみたいだけど、俺は特に報告することもなかったの、近状を簡単に報告するだけにして終えた。

面識もあり、俺にとっても姉のような存在である彼女が死んだ時は、悲しくて辛くて、幼なじみと葬儀場で泣きながら静かなやけ酒をして、火葬場にひどい顔で向かったことを思い出した。あれから五年経つのにその時のことは鮮明に思い出すことができる。

広がる灰色の空は今日の俺たちと彼女の心の色なのかもしれない……とは言えなかったの、幼なじみがお参りをしている間、俺はどんよりとした灰色の空を見上げて待っていた。

「お待たせ」

「ああ」

「終わったし、帰るか」

「だな」

後片付けをして、住職に借りたものを返しに行く。住職に返した後に出ようとしたら雨が降ってきたので、住職をお願いをして雨宿りをさせてもらえることになった。すぐ止むといいけど。



## 空 夕暮れ空

橙色に染まった空の下を自転車で走る。雨宿りをした分、予定よりも遅くなったけど、なんとか暗くなる前に戻って帰ることができそうだ。しばらく走ると、よく通り慣れた道に戻ってきた。

「ん？」

神社すぐ手前の公園に屋台が沢山並んでいて、俺たちは思わず自転車を止めた。

「今日はお祭りだったのか」

「すっかり忘れてた」

「俺もだ」

子供の頃から毎年行っているお祭りなのに、あの年以降は行かなくなっていた。

「ファミレスもいいけど、今日くらいは祭りの屋台で何か食うか」

「だな」

「祭りが始まるには少し早そうだけど、どうする？」

「一旦帰って自転車置いたらさ、また集合しないか？ 俺、今日はビール飲みたいんだよ」

「異議なし。俺も家に帰って猫にご飯をあげたいしな」

「じゃあ、また後でな」

「おう」

俺たちは一時の別れを告げ、それぞれの道を自転車であつていく。黄昏の空が少しだけ心許なく感じた。

## 空 夜空

「二人共、はやくー！」

勝色の空の下。

屋台のおじさん達の声。

様々な人たちの賑やかな声。

それらに負けなくらい明るく高い声が俺たちを呼んだ。

「姉貴、俺たちよりも子供みたいだ」

「確かに」

「別にいいでしょ！ 立派な弟たちがいるんだから、私はいいの」

「なんだよ、それ」

幼なじみは呆れたような苦笑いを浮かべている。いつものことだと慣れているから怒る気にもなれないらしい。それは俺も同じだ。

「それよりも、早く場所取りしないと！ キレイな花火があまり見れなくなっちゃうよ！」

「もう手遅れだと思うけど」

「だな」

「ほら、いいから、早く早く！ 食べ物も買うんだから！」